

鈴木よね (二)

世界市場で

後半の鈴木商店の主役には、高畑誠一が加わる。明治四十二年（一九〇九）神戸高商を卒業、同時に鈴木商店に入店した。彼は三井物産を志望したらしいが、当時の校長の強い勧めで鈴木商店に入ったという。校長は東京高商の出身で同窓の西川文蔵を知り、神戸商業会議所で特別議員として同席した金子直吉を知るに及んで、高畑誠一の運命を鈴木商店に結びつけたという。もし高畑が志望どおり三井物産に入っていたら、鈴木商店はどうなっていたら。歴史の仮定にはあまり意味がないかもしれないが、そういう誘惑に抗しがたい運命の配置なのであった。

鈴木商店は二十代の高畑をロンドンへ送り込んだ。若い支店長は世界市場を相手に立ちまわり、世界の猛者たちを刮目させた。高畑の商才は本店の独裁者・金子の積極策、拡張策とみごとに響き合ったのである。

荒井 とみよ

三国間貿易が始められた。ヨーロッパから日本へ鉄鉄などを運んだ船舶の帰路を利用して、サイゴン米を積みフランスに売り込んだりした。大戦による食糧難に乗りて船ごと売り込む「一船売り」も世界の商人たちを驚かせた。スエズ運河を通過する船の一割近くに「米丸」の旗が翻った日もあったという。イギリス政府もフランス政府も鈴木商店にとっては一介の客であった。各海外支店と金子直吉との間に張り巡らされた連絡網に、秒刻みの情報が行き交った。

このころ鈴木商店は、政府や新聞社を凌ぐ情報を集めていた。

大正六年（一九一七）には年商は十五億円を越え、ついに三井物産を抜いてトップに立った。このとき金子直吉が高畑誠一に宛ててしたためた手紙は「天下三分の計」として語り継がれている。

「……今、当店の為し居る計画は凡て満点の成績にて進みつつ在り、御互に商人として此の大乱の真中

に生れ、而も世界的商業に關係せる仕事に従事し得るは、無上の光榮とせざるを得ず。即ち、此戦乱の変遷を利用し、大儲けを為し、三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで、天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也。小生共是が為め生命を五年や十年早くするも縮少するも、更に厭う所にあらず。要は成功如何に在りと考え、日々奮戦罷在り、恐らくは独乙皇帝カイゼルと雖も、小生程働き居らざるべしと自任居る所也。ロンドンの諸君是に協力を切望す。小生が須磨自宅に於て、出勤前此書を認むるは、日本海軍に於ける東郷大將が彼の『皇國の興廢此の一挙に在り』と信号したると同一の心持也。

大正六年十一月一日

須磨自宅にて金子直吉

この書簡は『金子直吉遺芳集』の冒頭を飾っている。奔るような氣迫が墨痕に充ち、読む者をして異常な昂奮に誘わずにはいない。国内においては、大正六年、米沢市に人造絹糸の製造所を創り、帝人人造絹糸株式会社を設立した。鈴木商店の最も華麗な活躍の時期であった。このとき社長よねは、

何をしていたのだろうか。

よねの当座帳

神戸市役所の市立博物館設立準備室の倉庫に、鈴木よねの当座帳が保存されている。

それは美濃紙野紙三百枚からなる大部なもので、扉の一枚目に署名があり、「明治四十二年八月二十四日 目出度はじめ」と書き出されている。頁の上部を墨で黒く塗って、いくつもの項目に分類している。「記念品寄付関係」、「書画骨董類」の購入、「一般会計」の記録、「岩蔵米國滞在中関係」、「仲次郎学校関係」、「入会的事」、「住所録」という具合に繰り出すことができる。

二万円の寄付があるかと思えば、一円の瓦せんべいの代金も記録されている。神戸女子商業学校へ多額の寄付を続けている記録もあれば、結局は全うできなかったという甥の仲次郎東京遊学のための諸費用、下宿のことまで書かれている。

最も細かいのは一般会計の部である。店方より入った月並みの金を女中、車夫、別荘番、親戚付き合いに分配した内方の記録である。

女中たちへの給金によって、六人から八人ほどの女たちの序列がわかるし、嫁たちへの小遣いにも差があつて、よねを取り巻く人たちの配置、比重が想像される。けれどもこれは大店の女主人の多くが必ずやっている采配であつて、特に鈴木商店の社長のそれではない。出費は、明治末から大正中期へと数十倍に膨れ上がっているのに対して、女たちに渡る金額はほとんど変化していない。大商店鈴木の家内は、十年一日のようなつましい生活を強いられていたようである。

よねが誰によりも厳しかったのは、彼女自身に対してであつた。年商が数百万円時代から、十数億円時代へと飛躍している鈴木商店の社長の座にあつて、彼女の姿勢がまず十年一日のように変わらなかったものである。

怠らず巡る時計のほりを見て
おのが怠けの恥しき哉

（『波の音』）

時計の針を見ておのれの怠けを反省するよねは、家族たちには重い威圧であつた。

彼女にはいつも事業のすべてが、企画の全部が伝えられていた。彼

女の前で論議され、裁決が待たれた。答えはいつもきまつていた、「それでよろしいです」と。

直吉に失敗があつたように、柳田にも高畑にも失敗があつた。しかし彼らは決してそのことで責められなかった。全責任はよねにある。やりたいただけの働きをするがよい。よねのこの精神は、鈴木商店の社員構造の細部にまで行き亘つていて、上司は部下の働きを評価するが責めない。

この構造は「家」に似ている。商店の初期においては、社員は三度の食事を会社でとっていたというから、家そのものともいえる。その頂点によねはいたのだ。だからすべての業績はよねのものということなのかもしれない。

大正六年（一九一七）、アメリカがイギリスに次いで鉄材の輸出禁止政策に出たことは、資材を外国に頼っていた日本の造船界に大騒動をもたらした。政府は鉄材を輸入してその支払いを建造した遠洋大型船ですという、いわゆる船鉄交換交渉に乗り出したが、物別れに終わった。業界総動員の民間交渉も失敗であつた。

このとき金子直吉が登場した。

世界を相手に日本を背負つて交渉の場に現れたのは、風采の上がらない小男で、極度の乱視と近視のメガネの奥の目は斜視でもあつた。焦点の合わない視線に対していると、だれも、いつのまにか自分の本質が見抜かれている錯覚に陥るのだった。人をそらさない話術の持ち主であつたが、一見したときは全く逆で、「ア、ソウ」「ヘイ、ソウ」と無愛想な相槌を打つ。ところが氣付いてみると、まふまふ直吉のワナにかかっているのだった。博覧強記は見すばらしい風貌に覆いかくされている。鬼才ぶりはいつちも後で、わかる人にだけわかるのだった。

その男が日本の海運界の命運を賭けて闘い、みごとに成功してしまつた。『波の音』の跋文も、よねに手向けられた弔辞も、この成功をよねの業績として称賛している。しかもこの弔辞は直吉自身が書き、彼が声涙ともに霊前で読んだものである。直吉はいう。

「……米國ノ鉄材輸出禁止ニ遭遇スルヤ、所謂船鉄交換ノ契約ニ依リ、滞リナク約束ノ鉄材ヲ輸入シ、是ヲ各造船所ニ引渡し、予定ノ造船ヲ終ラシメ、一部ハ米國ニ売渡

シ他ハ日本ノ海運界ニ運用スル目的ヲ以テ、國際汽船株式会社ノ設立ニ尽力シ、其ノ運用船ト為シ、日本海運界ノ一大勢力ヲラシメタリ」

家に似ているが家ではない、不思議なピラミッドである。そのような共同体が、よねを頂点として構築されたのである。

暗い予兆

明治末から大正期へかけての日資本主義の急激な膨張は、発展というにはあまりに歪であつた。「成金」という呼称には、そうした歪な狂乱への嘲笑と揶揄が含まれている。大戦景気によって、船成金、株成金、鉱山成金、鉄成金が雨後の筍のように発生し、戦後恐慌の波を受けて泡沫のように消えた。

大正三年（一九一四）、すべての商品船舶に対するいっせいの買い出しに出、みごとに当て、一挙に一億数百万円の巨利を得た鈴木商店もまた、成金の一人であつた。

鈴木の本宅は「須磨御殿」とも呼ばれた一万二千坪の宏大な邸宅で、政財界の大物たちが神戸を通る際には必ず立ち寄ったともいわ

れている。金子直吉の住居も須磨一の谷にあって、谷川を埋めた広い芝生や果樹園、温室やボイラー付きの浴室、淡路島を眺望するサニールームが工夫されていた。

よねはどんな豪邸に住むようになって、子年の始末屋と自称もし、けちと陰口もたたかれた。直吉の不思議な屋敷は彼の探究心の表現でもあって、ぜいたくや遊蕩とは無縁であった。鈴木商店についてまわるエピソードには質素儉約の色が濃い。

ひとり長男岩治郎が成金らしきを引き受けていた。釣のために浜辺に家を建て、舟を持ち漁師を抱えた。馬には全国を付いて廻るほどの熱の入れようで、競場場を作るのに多額の私財を投じた。美食の逸話も女のそれに劣らず多い。

この二代目を知る人は、鋭い眼光が腹の底まで見透かすようでこわかったといい、気をそらさない魅力のある人だったという。前の批評は多く男たちのものであり、後ののは女たちのものであった。

彼はおそらく明敏な人であった。彼はおそらく明敏な人であった。母親の器量を知っていた。世間の息子が母親を理解するよりもよく深く。金子直吉を初め

とする幹部たちの能力も見抜いていた。そして何よりも、よねを頂点とする不思議なピラミッドの構造を掴んでいた。長男が登場するとその構造は微妙に変化するはずであった。彼はそこに変化を生ぜしめぬほどに無能ではなかったから。蕩児の名をほしいままにして、ありあまるお金を使うこと、これが彼が自分自身に強いた役割であった。その役を演じ切ることが、よねや直吉への協力であった。家に似た鈴木商店の構造は、擬制であるからこそエネルギーを持っているのだと、二代目岩治郎は思っていたのである。

大正七年七月、富山に端を発した米騒動は、八月に入って神戸にも吹き荒れた。神戸における小売り米価は、七月初め三十四・三銭（二升）であったものが、八月八日には六十・八銭にまで高騰した。これは門司市に次ぐ高値であった。米価とともに家賃も急上昇していた。大戦景気によって神戸市の労働人口が急膨脹し、住宅事情を悪化させていたためである。一年も経たない間に家賃は二倍を越えた。労働者は食と住の両面から締めつけられた。兵庫県下でこの年の七

月から八月にかけて発生したストライキは十一件もあった。鈴木商店が焼き打ちに遭う二日前から、三菱造船所では労働者がストに入り、暴動の兆しをみせていた。不穏な空気の中で夕闇が迫るところになると、群衆はあちこちの公園に集まり、口から口へ「焼き打ち」の噂がささやかれるのだった。

鈴木商店の本店は、もとミカドホテルと呼ばれた建物を引きとつたものだった。ミカドホテルと命名したのは後藤新平であるが、何かにつけて後藤の名が鈴木と結びつけられたのは、この米騒動のときに特に著しかった。政治家後藤への批判が過熱化していたときでもあり、そのキャンペーンに成金・鈴木商店を用いる効果は大きかったのである。

八月十二日、前夜の小ぜり合いで、湊川公園に集まって来た群衆は逸つていった。東川崎町一丁目にあった鈴木の本店は、湊川公園から押しかけて来るのにちようどよい距離にあった。同じころ栄町四丁目の鈴木旧店が襲われ、火の手が上がった。群衆は「およね婆を出せ」と喚き、焼いていっそう興奮した。この一隊が東川崎町の本

店に合流したのである。黒い群衆は「焼け、焼け」とどよめいた。九時二十分に燃え上がり、十一時にはすべて烏有に帰した。鈴木商店を焼いても群衆はまだ収まらず、辻向かいにあった神戸新聞社も全焼させたのである。

旧店にいて屋根伝いに逃げのびたよねは、「焼いてごないしますねん」と一言激しい怒りをもらしたが、それは鈴木商店の側の率直な気持ちであった。とりあえずよねは山陰に逃げた。三朝温泉に逗留したが、お供をした愛孫千代子にも、もう一言もぐちはいわなかった。屈託のない富裕な湯治客であった。

金子直吉も刺客に狙われているのもつばらの噂であった。彼は自宅には帰らず、柳田富士松宅で難を避けた。折から身重であった柳田夫人にはこの事件は過重で、出産の後、回復できなかった。それは暗い葬送であった。よねには、店方の災難よりもこの奥向きの不幸のほうがよほど辛かった。

あらゆる事業で飛躍を重ねているときに、なんで薄利の米の買い占めなど、と鈴木側の側は怒った。政府の意向を体して米価調節に協

力しこそすれ、恨まれる筋はないと憤った。

しかしこれを、起こるべくして起きた事件と見る内部の目もあった。巨大資本がすでに組織を近代化し、財閥体制を整えつつあった時期である。鈴木商店は金子総帥にすべてを委ねた小商店のままであった。裾野ばかりが広がっていくことを危惧する声がこのころから生じていた。それは主に新しい学問をして入社して来たものの中から起こっていた。

金子体制の批判者の旗手は、ロンドンの高畑誠一であった。「本店が焼き打ちに遭ったのを苦い薬にして、災い転じて福にしなれば」と若い旗手は西川支配人に書き送って来た。

金子直吉が信頼してやまなかった西川文蔵であったが、彼は高畑の最もよい理解者でもあった。西川は書いた。

「三井三菱は看板の手前従来相当の仕事をして、慈善事業を天下に公表致居候共、鈴木は此手段を取らず、反て金子氏は如斯行為を目して天下に媚を売るものとして排斥しつつあり、三井三菱が不清不浄の行為を知るは知織階級の

み、天下の衆愚は其徳を謳歌せり」慈善事業というのは、米騒動の際、三井・三菱が多額の寄付を行ったことを指している。金子直吉は寄付の必要を認めなかった。事業を拡大し発展させることすなわち国益に直結している、われわれは多くの貢献を国家に対してしている、百万や二百万の寄付が惜しいのではない、とつばねていた。

西川はようやく直吉を説得して寄付に応じたのであるが、出足は決定的に遅れていた。西川は「金子君一流の高潔なる遣り方は果して現代の思想に合致するや疑なき能はず」とぐちめいて書き添えずにはいられなかった。

西川文蔵は、鈴木商店においてなくてはならない人であった。新旧世代、子飼いの社員と学卒社員の間で立つて、いつも金子直吉を補佐してきた。そして本店の様子を細かくロンドンの高畑に書き送っていた。そこには苦衷を誰にももたすことのなかった西川の心情がひそかに流露して、格調の高い文章となつていく。数多いそれらの手紙は製本されて、今も西川家に愛蔵されている。

西川文蔵は米騒動の二年後に病

没した。長男に文蔵と命名していた直吉は、「未亡友人」と自称して慟哭した。西川が、その明敏さのゆえに、鈴木商店を除々に覆い始めた暗雲を早くも感じとっていたこと、そのやさしさのゆえに、人より多く苦しまねばならなかったこと、それらが病弱であった西川の死期をいつそう早めたことを、直吉は誰よりも知っていた。鈴木商店にはまた辛い葬送であった。

資本家は素顔を持たないが、成金には固有名詞がつきまとう。鈴木商店は素顔をもつていた点でやはり成金なのであった。今も神戸の老人たちは米騒動を語るのに「鈴木本の倉庫には米と砂糖があふれていた」というのである。「金庫には金があふっていた」というのである。しつかり者のおよねさんがやり手の直吉の手綱をがっしり握っていたというのである。

飢えた民衆は顔を持った敵を求めていた。鈴木商店が米騒動において、贖罪の山羊となったのは偶然ではなかった。爆発的な民衆のエネルギーを自分のほうに呼び寄せる体質を、鈴木商店はもっていたというべきなのである。

倒壊

明治維新以来、相次ぐ内乱は農民から土地を奪い、インフレは貧民を巷にあふれさせた。土地は大地主に吸い上げられ、富は政商と呼ばれる資本家に雪崩れ込んだ。いつも政府は富める者たちを助け、肥え太らせた。相次ぐ大戦がこれらの構造をいっそう強化した。

成金という狂い咲きは、大戦後の恐慌にあっけなく潰え去ったが、権力に結びついた大資本は、組織の編成変えをしてこの危機を乗り越ろうとした。

三井系資本が流通・生産・金融の諸分野で独占的地位を確立し、三井同族会の改組を行って、三井合名会社を設立したのは明治四十二年（一九〇九）である。それまで同族会の統制下にあった諸事業を独立させ、それぞれが株式会社となった。ある部門が倒産しても、他の事業に波及しない体制を整えたのである。三井物産、三井銀行などの直系会社は、三井合名の所有として三井家の支配下に置かれ、再投資を可能にした。巨額の資本の蓄積がこうして進められ、多角経営を基礎とする総合コンツェル

ンの形態が整えられた。三菱合資が傘下の諸企業を独立採算制に転換させるのは明治四十一年である。他の財閥も似たような形態をとって政治経済の複雑な変動に対処しようとし、独占的地位の確保をゆるぎないものにするための努力が払われていたのである。

鈴木商店が合名会社鈴木商店から株式会社を創設し、財閥体制の整備に入ったのは、遙かに遅れて大正十二年（一九二三）三月のことである。社長・鈴木よね、副社長・岩治郎、監査・岩蔵、専務取締役・金子直吉、常務取締役・柳田富士松という陣である。

第一次大戦後のヨーロッパへの食糧輸出やジャワ糖買い出動で大いにあて、「盲滅法の前進じゃ」と乗りに乗っていた金子直吉であった。彼はロンドンの高畑誠一へ書き送った。

「想ふに小生等は今日迄奉公人の資格にて此の経営を遣り来れるも、今後は主人の資格にて、鈴木商店に君臨するにあらざれば、大小の人材を縦横にし、事業界に優秀の地を維持する事態はざるべし」と。

岩治郎の長女千代子は、よねが

溺愛してやまなかった初孫でもある。彼女を急きよパリに送って高畑と結婚させた。高畑は主人にならねばならない人であったからである。千代子や高畑に有無をいわせないものがあつた。直吉の是とすることは鈴木商店にとつて是である。よねにとつても当然そうである。まして若い二人は今、鈴木商店の遠大な夢の大切な一部分であつた。

後継者を指名しながらも、金子直吉は引くときがなかった。三井・三菱と年商を争うことはすでに無邪気な挑戦でしかなかった。相手はその年の競争は捨てて、十年先、二十年先のための整備を行っていたのだから。

大正十一年「飛びゆきて太平洋を春の風」と発句した金子直吉は、一年後には「背水の陣屋を囲む桜かな」と詠まねばならなかった。財政の逼迫は急を告げていた。気付いてみると、背水の陣屋で敵に立ちむかっているのは彼ひとりであつた。一人であることを彼自身が選びとっていたのである。詰めて寄っていたのは債権者たちであつたが、鈴木商店の内部の批判も一人の独裁者に向けられていた。

当時の資料の一つとして、和とじの冊子が残っている。大正十一年（一九二二）の重役室日記である。大正十一年一月一日の記録から始まっている。その日は晴天の日曜日であつたが、本店の食堂で盛大な新年の祝賀会が挙行されている。「お家様、御主人様、若御主人様、御来店八時五十分〜九時五十分」店員はもとより外からの数名の年賀の客も記名されている。

この記録には休日がない。日曜日も二人の重役、柳田、金子は早朝出勤し、人に会い、外出し、接待している。接待の場所には長崎料理屋、宝屋の名が多い。直吉は常々「日曜日を休めというのなら、銀行も日曜日の利子をとるな」といつていた。

一方、よねは全く不規則に出勤していたようである。「お家様御来店ナラズ」とある日が多く、そんな日が数日続くと、十時か十一時ごろ「御来店」になって二時ごろ「御退遊アソバサル」の記述がある。彼女は小さい印鑑袋を女中に持たせて、黒い乗用車をゆつくり走らせて出勤してくる。自宅の庭で丹精した花や野菜を運び込み、

社員に配った。端午の節句には柏餅を持って来た。各部屋から人数分の柏餅を社長室に貰いに行く。社長室とはそのような部屋でもあつた。

「御来店アソバサル」れた「お家様」は、社長室の大きな椅子にぼつねんと坐つて何をしていたか。たとえば雑巾を刺していたのであつた。よねの雑巾は、やがてできる神戸市立博物館にも陳列されるはずである。白い晒木綿に黒い木綿糸できつちり幾何学模様に刺してある。何百枚、何千枚という雑巾をよねはその生涯に作つた。多くは「店」で用いられ、古くなつて捨てられたが、知人への贈り物にもしたのである。祥竜寺の今の住職は、先代から受け継いだよねの雑巾をつい近年まで硯の下に敷いていたという。

またよねは手習いで過ごすこともあつた。どんな包み紙もしわをのばして保存させていた。その使い古しの包装紙の裏に「鈴木よね」の署名の練習をした。大会社の社長である。署名の機会はますます多くなっていた。どんなものもよねは粗末に扱わなかつた。また他人にも無駄を決して許さなかつた。

そのようにしてよねは、金子直吉が文字通り東奔西走するのを見ていた。何回上京しても情況が好転するとは思えなかつた。よねは直吉が敵陣を切り崩すのを幾度見えて来たことだろう。直吉二十代のときから、彼が切腹する覚悟で窮地に挑み、みごとに脱出するのを見て来た。よねは一件落着の報告を受けるだけであつた。

今度の苦況がかつてのそれと異質なものであることが、よねにはわかるのであつた。手習いをする筆先に、雑巾を刺す指に、それは感じられた。しかし社長室でよねはいつも言葉少なであつた。

冬の初め世は不景にて
こはる日に市人多く賑はへと
あたたけからぬ世のけしきかな

（波の音）

関東大震災は活気に充ちた大正期に終焉を告げた。それは同時に暗い現代史の象徴的な幕開けでもあつた。関東の地震に日本全体の経済は大きく揺さぶられた。鈴木商店は中でももっとも激しく揺さぶられたのである。

潰滅状態の経済界に、政府は何かの保護と保障の手ののべねばならなかつた。未決済手形は二億

円を越えていた。それらは特殊銀行と普通銀行に半々に所有されていたが、特殊銀行の分の大部分は台湾銀行のものであつた。そしてその大部分は鈴木商店への貸し出しであつたのである。

鈴木商店は財閥としての体制は整えながらも、六十五銀行という小さな銀行を一つ持っているだけで、多くを台湾銀行に頼っていた。三井・三菱が機関銀行を持つて不況時に備えていたのと対照的であつた。金子直吉——後藤新平——台湾——台湾銀行というつながりひとつに、六十社を越える関連会社への融資を委せていた。

大正九年、台湾銀行の全貸し出し高に対する鈴木関係の比率は二割だつた。それが昭和元年には七割にふくれ上がるという具合であつた。そのうち一億円近くが無担保債権であつたということは、両者の関係の放漫さを語つてあまりあるのであつて、資本金四千五百万円の銀行から四億円以上の借金をしたという事実には、人々は「貸しも貸したり、借りも借りたり」とあきれたのであつた。

昭和二年になった。政府はまさか台湾銀行を見殺し

にはすまい、台湾銀行はよもや鈴木を切るまい、と金子直吉は賭けた。誰の助言も聞かなくなつた直吉には、かつての躍動するような視野が欠けていた。金融恐慌の波は思いがけない荒々しさで襲いかかつて来た。鈴木商店にとつて絶望的な時間が、秒刻みで始まつた。三月末に台湾銀行が整理に踏み切つた。その最初の仕事は、最大債権者である鈴木商店への新規貸し出しを一切中止するという通告であつた。この事件は金融市場に新しい不安を巻き起こし、全国恐慌第二波の口火となつた。

台湾銀行の首を決定的に締めたのは、市中銀行が台湾銀行への短期融資を一斉に引き上げたことである。これを最も強力に迫つたのは三井銀行であつた。台湾銀行は日本銀行と政府に援助を求めたが前者はこれを拒否、後者は緊急勅令案でこれを補償しようとした。ところが枢密院がこれを否決してしまつたのである。内閣は直ちに総辞職した。枢密院は政友会、政友会は三井系という系譜をたどつてみると、ここにも鈴木商店の永年の競争相手が浮かび上がってくる。金子直吉の「天下三分」の競

争を三井も確と受けて立ち、完膚なきまで鈴木を打ちのめしたのである。鈴木商店の息の根を止めること、金子直吉を崩すには、全国の金融市場、いや世界恐慌の嵐を要したともいえるのである。

鈴木商店は倒産した。四月二日のことである。永年住みなれた東京の常宿、ステーションホテル二十号室を去る日に、金子直吉は「落人の身を窄め行時雨哉」と詠んだ。年の暮れに覚悟を決めて詠まれたのであるが、その年の花の春にも、直吉に降る雨はまるで時雨のように冷たかつたとも読めるのである。

台湾銀行は鈴木商店を切るに先立つて、実は鈴木商店再建の案を示して来ていた。高畑誠一や永井幸太郎等の新鋭を中心に新生を図り、株式会社鈴木商店を主体とする経営体制に入ること、金子直吉は鈴木合名の理事として関係会社の整理に当たることを要求したのである。

よねはこの間「エレベーター」のよう、降りてしまふまでは気持ちの悪いものやなあ」ともらした。が、あたふたする様子はなかった。「直吉さえいてくれれば千人力じや」というのが口癖であったよねに、金子直吉のいない鈴木商店はありえなかった。

社長よねは、こうして退場した。三十三年前によねは彼女自身の意志で、鈴木商店の主の座についてた。そして今、彼女自身の意志でその歴史に幕を降ろした。「よねは何もしませんでしたよ」と人々はいうかもしれない。しかし少なくとも二つのことはしたのである。幕を上げることと降ろすことはよね自身の決定であった。

祥竜寺の境内でお薄茶碗を手にしたある人は、倒産のとき入社して一年目だったという。彼は上役と呼ばれ、会社の運命を知らされた。そして身の振り方を問われたという。関係会社へ行くもの、他の企業に紹介されるもの、故郷へひとまず帰るもの、希望に応じて散ったという。

長い人生におけるたった一年の縁である。今なお彼と鈴木商店を結びつけているものは何なのであ

ろうか。

道楽というものを知らなかった金子直吉の唯一の道楽は、学生を養育することであった。須磨一の谷の屋敷には常時数名の書生がおり、若い実業家たちが訪れ、梁山泊の観を呈していた。彼らに直吉はいったものだ。

「君たちは試験問題ひとつくらい間違っても九十点とか八十点で済むが、社会に出てする仕事は一つ間違ったら零点だ」。金子直吉の答えはいま零点と採点されて戻って来た。大正十一年正月に「命懸の喧嘩仕様ぞ成の春」と詠んで自らを土佐犬に擬したのであったが、彼は今、惨敗の喧嘩犬であった。けれども倒産後、京都山科に蟄居していた直吉は、しおたれていたのでなかった。鈴木商店再建のために動き廻ること、大家族を擁して窮乏している元社員就職のために奔走すること、寧日ない毎日だったのである。

直吉が青年たちを育てたように、よねは社員の妻たちを育てた。新妻たちは正装して「鈴木御本家」へ挨拶に伺う。案内を請うと執事が現れて奥座敷の大広間に通す。待つこと少々で「お家様」のご入

来である。上座床柱の前に紫縮緬の厚い座布団を二枚重ねた高座が作られていて、よねはそこに座る。右側に脇息が置かれていて、「尼將軍」と呼ばれてもしかたのない演出なのであった。よねは柔かい姫路訛りで、固くなっている新妻に一言二言の質問をする。お目見えはそれで終わりであった。

正月や、よねの誕生日・八月十五日には賑やかな園遊会が催された。女主人の両脇を岩治郎夫人、岩藏夫人が固めた。二人は姉妹であった。県立第一女学校のハイカラな千代子は「孫姫様」と呼ばれた。社員の妻たちには、結婚するとすぐ紬が一反贈られるのであった。よねの紋所桔梗が一つ入った黒鉄色の着物は、鈴木商店婦人会の制服である。折々の園遊会、運動会などの催事のたびに、彼女たちはその着物で集まった。地位の上下を問わずその着物を着た。よねは女たちの無駄な華美贅沢の競争を固く禁じた。

鈴木商店という舟は難破した。社員は家族ともども水に落ちた。が溺れ死んだものは一人もない。舟で学んだように、水に落ちて学んだ。鈴木は私の学校だという人

も多い。そこで学んだことがその人の今につながっているのである。だから彼らは辰巳会に集う。悲壮な顔も感傷的な思いもそこにはないのである。

「帝人」や「豊年製油」「神戸製鋼」「播磨造船」を知らない人は少ないだろう。鈴木商店は滅んだ後にこれらの事業を遺したのである。債権者会議も開かれず、破産宣告も受けなかった。

整理会社・株式鈴木は「日商」となって再建され、めざましい発展をとげた。「日商」は昭和四十三年、岩井産業と合併して「日商岩井」と改称した。

金子直吉が鈴木家再興の最後の夢を賭けていた会社・太陽曹達は、その後、太陽鉱工株式会社に改組されたが、今もお直吉の胸像と鈴木よねの写真を守り続けている辰巳会の本部もここに置かれている。

晩年

その人を最もよく語るのは、舞台の上で主役を演じていたときよりも、そこを降りてからではないだろうか。

鈴木よねにとって、鈴木商店社

長の座というのは、やはり厚化粧、舞台装束であつたし、金子直吉にとつても、経済界の鬼才としての縦横無尽の働きは、舞台の上の立廻りのようなところがあつたのである。

よねは鼓、笛、謡、三味線などの芸事一般に長じていたが、晩年に最も熱中したのは和歌であつた。毎週土曜日は黒い乗用車が彼女のために空けられた。西宮の師のもとへこれで往復した。

西宮行きの日、よねはいつもより早く起きる。家の内外に祀つてある戎様、大黒様、荒神様とお参りをする。これは毎朝のこととて、その途中、女中たちは働きぶりを点検される。箒の使い方、雑巾のかけ方、襖の開け立てはもとより、歩き方、返事の仕方にも、よねの鋭い目は光った。彼女が一番嫌つたのは口応えであつた。「はい」という答えだけが通つた。「今からやります」も反抗であつた。よねは絶対服従を要求した。

仏壇の札拝が済むと食事である。食事は三度とも粥であつた。「お粥たきの婆」がいた。雪平でごはんの少し柔らかめのものを炊かせた。気を配っていないと雪平の粥はこ

げるのだつた。そんなときもあらかじめお詫びをすれば許されたが、黙っていると「こんな煙くさい粥は食べられん」といつて叱られた。それから髪を結うのであつた。

初めは、髪結いの老女が来ていたが、晩年はお傍女中のつやが丁寧に仕上げた。薄くなった結いにくい髪を一本ずつ並べるように梳いて結うのに、一時間はかかった。早く仕上げすぎてもならないし、遅くならぬといけなかつた。

それからお召し替えである。よねはちよつとの外出にも、それは夏も冬もなく、下着の全部をとり替えた。いつどこで不慮のことに外出のときは必ず吸筒というものを携行した。金の水筒でおすずぎの湯ざましを入れていた。訪問先に入る前に、よねは必ずそれで嗽をした。

よねの乗用車は阪神国道をゆくり走る。車の数は少なかった。若いやつにとつて、それは睡魔との闘いのときであつた。よねの一条乱れることのない日常に組み込まれている以上、つやにも乱れることは許されなかつた。つやの厚

い木綿の着物は一か月で膝が抜けるのであつた。仕えるということとは、文字通り膝をつくことであつた。

その土曜日を控えたある日、「今日は少ししんどい」といつて早く床をとらせたが、それが、最期であつた。来年は米寿だとよねも家族も健康を喜んでた矢先の、あつけない死であつた。昭和十三年（一九三八）五月六日である。

金子直吉は、一夜にして長文の弔辞をしたためた。よね刀自の偉業を称え、婦徳を慕い、報恩の志を述べた。

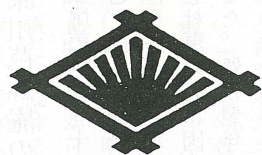
「刀自ノ一生ヲ通観スレバ鬚髯男子ヲ瞠若セシムルニ足ルノ概アリト雖モ刀自ハ居常甚ダ閑雅謹直ニシテ温容自ラ任ジ喜ブコトアルモ怒ルコト無ク自誠スルコトアルモ人ヲ責メズ而シテ部下ノ愛育ニ努メタルモ何等教誨モ是ヲ加ヘズ（略）是レ鈴木商店員が刀自ヨリ受ケタル海嶽ノ御恩ト言ハズシテ何ゾヤ（略）唯惜シムラクハ吾等不敏ニシテ刀自ノ生前ニ於テ社礎ノ興新ト事業ノ回復ヲ為シ能ハザリシヲ無上ノ遺憾トス（略）」

一気呵成、号泣に似た文体である。

金子直吉は倒産後、一段と頑迷になり、誰の忠告にも耳をかさなかつた。主家再興の情熱に憑かれて、多くの手紙を各方面に書き送っているが、『金子直吉遺芳集』に収録されている。怒りに似た、ぐちに似た繰り言は、社会の歯車と噛みあわなくなつていよいよ純化していったかのようである。

直吉には、次男武蔵が東京大学で哲学を専攻することは不本意であつた。大学院へ進むとき、もう一度翻意を促して「経済学部へ」と命じた。父の命令に、世間の父親が子に託す夢をはるかに越えた悲願を感じとりはしたものの、頑固さを何よりも強く父から受け継いでしまった武蔵は応じなかつた。その父は子の労作、ヘーゲルの、『精神現象学』の訳書を「岩波書店」から上梓したのを受けとったとき、「蟬なくや樹下の老翁はつんぼなり」とふざけた。この中に悲壯感など読む必要はないのである。有能な息子も蟬である、有為の高畑誠一も蟬である。おまえたちやかましく鳴くがよい、わしには聞こえぬと老翁は聞き直るのである。

そして金子直吉には、あいもか



製造品目

蒸溜脂肪酸・単体脂肪酸・各種脂肪酸エステル
脂肪酸クロライド・ハロゲン化アルキル・ポリエチレン用滑剤
高級化粧品基剤・樟脳誘導体・精製樟脳

日本精化株式会社

取締役社長 宮永悠紀雄

大阪市東区備後町2丁目45番地
☎541 電話(06)231-4781(代表)



日本エアブレーキ株式会社

取締役社長 斉藤賢四郎

本社 神戸市中央区御幸通7丁目1-12
三宮ビル西館
郵便番号 651
電話 神戸(078)251-8101(大代)

事務所・営業所 神戸・東京・名古屋・
北九州・札幌
工場 神戸・東京・横須賀・
西神・甲南

営業品目

モリブデン・タングステン・接点・超硬合金
浸漚加工・モリブデンタングステンメッキ



東邦金属株式会社

取締役会長 家後修二郎

取締役社長 中村秀臣

本社 〒541 大阪市東区北浜3丁目3番地和光証券ビル
電話 大阪(06)202-3376
東京支店 〒100 東京都千代田区丸の内1丁目2番1号東京海上ビル
電話 東京(03)281-2894
工場 北九州市・寝屋川市

営業品目

重ね板ばね・コイルばね・トーションパー
スタビライザー・特殊ばね・線ばね・薄板ば
ね・シートおよびシートばね・パイプハン
ガ・パイプクランプ



日本発条株式会社

相談役名誉会長 坂本 壽

取締役会長 藤岡 清俊

取締役社長 池谷 政雄

本社 横浜市磯子区新磯子町1番地
支店 東京・太田・浜松・名古屋・大阪・広島
工場 横浜・川崎・滋賀・太田・豊田・広島・厚木・伊那

わらぬ猪突猛進ばかりであった。
昭和五年、ボルネオのレジャン河
流域に日本農民の移住と水田米作
の問題を話し調査を行う(六十五
歳)。マレーシアのボーキサイト
調査(六十七歳)。西豪州鉄鉱の調
査(七十一歳)。空冷式自動車装置
・消音装置の特許を出願して許可
(七十二歳)。ツンドラ事業を画策
(七十四歳)。ジャワの砂鉄を調査
(七十五歳)。大陸運河計画の調査
(七十六歳)。漁業農業の件で舟
山列島を調査しようとしてならず
(七十七歳)。
現実を無視した夢は自己増殖を
強め、狂的色彩を帯びてくる。直
吉が少年のころにみた夢が、かっ
てに走り始めたような晩年であっ
た。
昭和十八年(一九四三)末、東
京で風邪に罹ったのをこじらせて
御影の独居に戻ってから、直吉は
再び起き上がることがなかった。
事業のために私生活のすべてを犠
牲にした彼に、看取る家族はなか
った。この時期、直吉の最も近く
にいた人は高畑誠一とその夫人千
代子であった。
その生涯の緊迫した局面で、好
んで俳句に心境を叙して来た金子

直吉に辞世の句がない。まるで彼
の辞世の思いは芭蕉によってすで
に詠まれてしまったかのようなであ
った。
旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる
よねに遅れること六年、昭和十
九年(一九四四)二月二十六日、
享年七十九才であった。
辰巳会の人々は、金子直吉がよ
ねによって選ばれた、「お家はん」
のメガネに叶ったといっている。
しかし選ばれたのはむしろ、よね
のほうであったかもしれない。
朝明の明治時代には、多くの
金子直吉が貧相な体軀に夢をぎら
つかせて存在したのではないか。
けれども、ひとりのよねを選び、
完成させたのは金子直吉だけであ
った。この二人の稀有の共演が鈴
木商店の歴史であったといえよう。
形は株式会社であったが、鈴木
商店はついに近代企業にはなりえ
なかった。同窓会を二十年間も続
けている近代企業があるうか。
かといって、封建的な權威に裏
づけられている鈴木家ではなかつ
た。「白兎」と自称して忠誠を尽
くした番頭こそいたけれども、た

御会食・御宴会

ビフテキとすき焼

和室宴会 300名様迄
洋式宴会 500名様迄

スエヒロ

銀座店

銀座6丁目松坂屋裏
TEL 03-571-9271(代)

築地店

築地4丁目銀座東急ホテル向側
TEL 03-542-3951(代)

かだか大きな商家にすぎなかった。
その女主人は田舎商人の娘であつ
た。
たった三十年の歴史しか持たず
崩れ去ったものに「鈴木王国」と
いう呼称は大げさすぎるけれども、
彼らは家に似た王国を築いたので
ある。その王国にふさわしい主を
選んだのである。主は王者らしく

ふるまわねばならなかった。その
生い立ちにおいて既成の如何なる
權威とも無縁のひとりの女、鈴木
よねは、八十七歳で死ぬ瞬間まで
威厳に満ちたその役を演じ切った。
墓地の胸像が、その高い台座か
ら降りることは決してないだろう。